

県内集落出土の灰釉陶器の組成

—秦野市・伊勢原市の事例について—

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

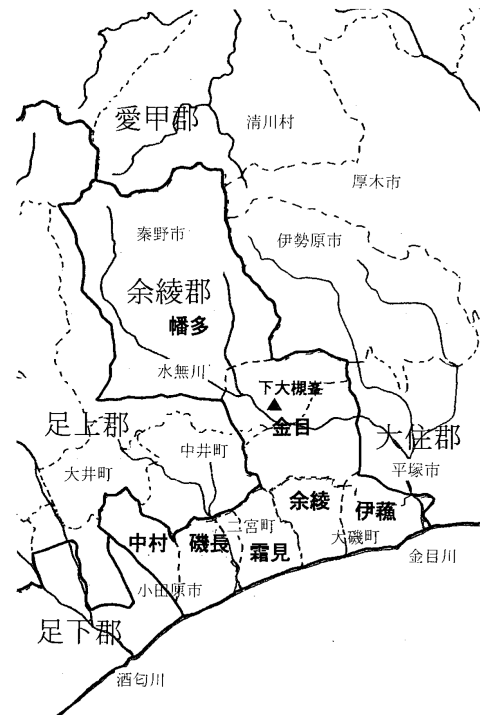
はじめに

近年、高速道路等の建設工事が増え、事前調査等による神奈川県西部の山間地で調査事例が増加している。山間地域でも灰釉陶器もある一定の出土量が認められることから、集落出土の灰釉陶器の組成を整理する必要性を感じ、まず現段階までの出土事例の集成を試みることにした。26号で取り上げた秦野市、27、28号で2回に分けて伊勢原市の山間地というよりは端部及び、その裾に広がる扇状地上に展開する集落と、市域北側の遺跡の事例を取り上げた。伊勢原市域では大規模な発掘がまだ継続しており、報告書の刊行も徐々に増えてくることが推察される。今号ではこれまでの集成を元に灰釉陶器の組成を両市域の県西部山間地の灰釉陶器の広まりを、時期と器種構成、数量をまとめ灰釉陶器の在り方と傾向についてみていきたい。

(1) 秦野市

秦野市内の古代集落調査遺跡は、集成時の2021年段階では45遺跡を数え、そのうち17遺跡から灰釉陶器が出土している。その総数は、椀類、皿類、瓶・壺類合わせて277点であった。そして報告書において、すでに集成されていた草山遺跡（1990年）も含めると、388点と増量する。内訳は椀類が239点、皿類が83点、壺、瓶類が66点で、椀の割合が全体の6割と最も多かった。秦野市域は地形や歴史的な背景から、盆地地域と大根地域に分けることができる。ここでは地域ごとに各遺跡出土の灰釉陶器の在り方と傾向について、まとめていくこととする。

盆地地域の遺跡では、東田原中丸遺跡、寺山中丸遺跡、草山遺跡、太岳院遺跡、諏訪原遺跡、尾尻八幡神社前遺跡、今泉新井遺跡、西大竹小原遺跡、曾屋入船町遺跡、中里遺跡の10遺跡から灰釉陶器が出土している。東田原中丸遺跡、太岳院遺跡、今泉新井遺跡、曾屋入船町遺跡は、調査面積が少ないことも要因の一つとして考えられるが、1点のみの出土となっている。出土量が特に多く注目されるのは草山遺跡で、盆地地域全体の約8割を占めている。草山遺跡は、秦野盆地の東側、丹沢山地より南に派生した標高100m前後の台地上に位置している。数回の調査により、6世紀末から10世紀半ばにかけて盆地内最大級の集落が営まれていたことが明らかとなっている。灰釉陶器を出土した遺構は、竪穴住居が大半を占める。図化されたものだけでも椀が86点、皿類が33点、瓶・壺類が18点を数え、器種構成



第1図 古代郡郷位置図（河野案）

第1表 器種別一覧

	尾野編年 窯式	800	830	860	890	920	950	1070	不明	合計		
		V期新	VI期古	VI期中	VI期新	VII期古	VII期中・新	VIII期新				
		折戸10号 窯式	井ヶ谷78 号窯式	黒笹14号 窯式	黒笹90号 窯式	光が丘1 号窯式	折戸53号 窯式	大原2号 窯式			東山72号 窯式	虎溪山1号 窯式
1 小南遺跡	椀 皿類 瓶・壺類			1	7 3	1 4		1		4	13 9 2	
2 東北久保・鳥居松遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				2 1						2 3 2	
3 鉾ノ木遺跡	椀 皿類 瓶・壺類			2	2 1	5					9 1 1	
4 根丸島遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				1						1 0 0	
5 大原117遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				3						3 0 0	
6 下大槻峯遺跡	椀 皿類 瓶・壺類			2 3 4	64 13 10	36 9 6		1 1		2 2 2	105 28 33	
7 鶴巻上原遺跡	椀 皿類 瓶・壺類									2 0 1	2 0 1	
8 東田原中丸遺跡	椀 皿類 瓶・壺類									1	0 0 1	
9 寺山中丸遺跡	椀 皿類 瓶・壺類			1	3						4 0 0	
10 草山遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				1	7 1				6 5 5	14 6 6	
草山遺跡1990年	椀 皿類 瓶・壺類			4 3	8 3	59 21		1 2			72 27 12	
11 太岳院遺跡	椀 皿類 瓶・壺類			1							1 0 0	
12 諏訪原遺跡	椀 皿類 瓶・壺類									5	5 0 0	
13 尾尻八幡神社前遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				3 1					2 4	3 6 4	
14 今泉新井遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				1						1 0 0	
15 西大竹小原遺跡	椀 皿類 瓶・壺類									3 2 2	3 2 2	
16 曾屋入船町遺跡	椀 皿類 瓶・壺類									1	1 0 0	
17 中里遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				1		2				0 1 2	
合計		8	11	23	133	80	71	3	3	1	55	388

は椀が主体となっている。窯式別の出土量では、光が丘1窯式が最も多く、全体の7割強を占めている。次いで猿投産の黒笹90号窯式のもので1割の出土量がある。前段階の黒笹14号窯式のものは6%ほどであった。盆地地域の他の遺跡では、尾尻八幡神社前遺跡で黒笹90号窯式のものが6点、黒笹14号窯式のものが1点、寺山中丸遺跡では黒笹90号窯式のものが3点、黒笹14号窯式のものが1点出土している。

大根地域は金目川と大根川に挟まれた北金目台地と、大根川と善波川に挟まれた鶴巻台地の両台地にあたる。本地域では、小南遺跡、東久保・鳥居松遺跡、鉾ノ木遺跡、根丸島遺跡、大原117遺跡、下大槻峯遺跡、

鶴巻上原遺跡の7遺跡から灰釉陶器が出土している。出土量が特に多く注目されるのは下大槻峯遺跡で、大根地域全体の8割弱を占めている。下大槻峯遺跡は、標高60m前後の北金目台地の一角に位置し、5世紀後半から10世紀後半以降まで集落が営まれていた。出土した灰釉陶器は竪穴住居出土のものが最も多く、その他、掘立柱建物跡や土坑から出土している。器種構成は椀が105点、皿類が28点、瓶・壺類が33点を数え、椀が主体である。窯式別の出土量では黒笹90号窯式が87点で、全体の約5割を占め、続く折戸53号窯式のもの3割となっている。大根地域の他の遺跡でも黒笹90号窯式のもの主体となっており、小南遺跡で11点、東北久保・鳥居松遺跡で5点、鉾ノ木遺跡で3点、根丸島遺跡で1点、大原117遺跡で3点と、遺跡ごとに高い割合を占めている。続く折戸53号窯式のものも、小南遺跡で5点、鉾ノ木遺跡で5点出土しており、割合の傾向は下大槻峯遺跡と変わらない。

以上、盆地地域と、大根地域に分けて、傾向をまとめた。器種構成として椀が主体であることは、両地域で変わらなかった。初出は尾野編年Ⅴ期新段階（9世紀前半頃）の瓶・壺類がわずかに出土しており、ピークは尾野編年のⅥ期新～Ⅶ期古段階（9世紀後半～10世紀半ば頃）で、集落の隆盛期と比例している。

律令制下の行政区分では秦野市は余綾郡の領域となる。盆地地域は余綾郡北部の幡多郷にあたり、大根地域は水無川、金目川、葛葉川の合流付近から下流は金目郷にあたるとみられている。草山遺跡は幡多郷に属し、下大槻峯遺跡は金目郷に属しており、集落の規模や灰釉陶器の出土量の多さからも、両遺跡は各郷の拠点集落と言える。（諏訪間）

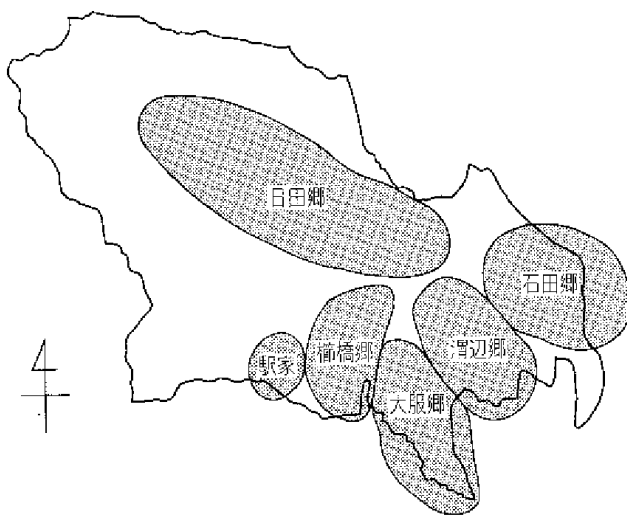
（2）伊勢原市南部地域

伊勢原市南地域としてとりあつかった遺跡は、坪ノ内・宮ノ前遺跡を中心とした鶴巻台地東北部のエリアで、沼目天王原遺跡を中心とした伊勢原台地南東部、古代では櫛橋郷、渭辺郷、大服郷付近にあたる。

南部エリアで出土している灰釉陶器は総数289点で、内訳は椀が174点、皿が37点、壺・瓶類が78点、蓋が1点であった。報告書本文では「高台付坏」として記載されていたが形状からみて椀に該当するため椀としてカウントしている。また、瓶類の中にもフラスコ瓶の口縁部に相当するものも含まれているため、その2

点は削除した。すべての資料を実見していないため報告書図版での見解となり、観察表等に産地が記載されているものについてはその判断に従った。

出土傾向としては、竪穴住居から出土することが多く、器種は椀（椀・深椀）がほとんどを占めている。尾野編年のⅥ期新～Ⅶ期古段階（9世紀後半～10世紀半ば頃）にピークがあり、徐々に縮小していく傾向がある。今回の中では比較的早い段階となる尾野編年Ⅴ期新段階（9世紀前半頃）に、神戸・上宿遺跡から猿投産の瓶類が出土している。同遺跡の竪穴住居から出土している灰釉椀をみると黒笹90～折戸53号窯式段



第2図 6郷位置略図

第2表 器種別一覧

	尾野編年	800	830	860	890	920	950	1070	不明	合計												
		V期新	VI期古	VI期中	VI期新	VII期古	VII期中・新	VIII期新														
		折戸10号 窯式	井ヶ谷78 号窯式	黒笹14号 窯式	黒笹90号 窯式	光が丘1号 窯式	折戸53号 窯式	大原2号 窯式			東山72号 窯式	虎溪山1号 窯式	百代寺 窯式									
1 坪ノ内・宮ノ前遺跡	椀 血類 瓶・壺類									13 2 4	13 2 4											
2 神戸・上宿遺跡	椀 血類 瓶・壺類				8	7			1		16 0 12											
3 板戸・八雲殿遺跡	椀 血類 瓶・壺類		2	2	4	4					2 0 0											
4 東大竹・市場V遺跡	椀 血類 瓶・壺類										0											
5 東大竹遺跡	椀 血類 瓶・壺類									30 5 8	30 5 8											
6 稲荷久保遺跡 第Ⅲ地点3、4次調査	椀 血類 瓶・壺類										0 0 2											
7 稲荷久保遺跡 第Ⅲ地点	椀 血類 瓶・壺類									1	1											
8 柏上原遺跡	椀 血類 瓶・壺類					1		1		2 1 2	4 1 2											
9 東大竹下原遺跡	椀 血類 瓶・壺類										0											
10 原之宿遺跡	椀 血類 瓶・壺類										0 0 2											
11 田中・第六天遺跡 第3・4地点	椀 血類 瓶・壺類			1							1 0 3											
12 田中・第六天遺跡 第2地点	椀 血類 瓶・壺類				1			1			1 0 1											
13 東大竹遺跡群	椀 血類 瓶・壺類					1				3	4 0 0											
14 田中・万代遺跡	椀 血類 瓶・壺類										0 0 0											
15 池端・椿山遺跡	椀 血類 瓶・壺類										0 0 0											
16 池端・板戸遺跡	椀 血類 瓶・壺類				1						1											
17 池端地区遺跡群	椀 血類 瓶・壺類					6 1	8 2 4			18 1 9	32 4 13											
18 沼目・吹上遺跡	椀 血類 瓶・壺類						1				1 0 0											
19 沼目・天王原遺跡	椀 坏・蓋 血類 瓶・壺類					8 2 3		1 1	2	33 3 9	43 3 12											
20 沼目・諏訪面遺跡	椀 血類 瓶・壺類			5 2	13 7	1				3 11 20	22 20 20											
											2	2	10	36	20	14	16		4	1	184	289

階としているものが多く、尾野編年VI期新～VII期古段階（9世紀後半～10世紀半ば頃）にピークがある。神戸・上宿遺跡を中心としたエリアの集落の様相は、7世紀末～8世紀初頭からはじまり、10世紀前半ぐらいまで続く集落であり、8世紀前半段階から継続して集落が維持される地区である。灰釉陶器の導入がピークとなる9世紀後半～10世紀前半代にも住居が多くみられる時期でもあり、橿原郷の中心地として存続してい

たのだろう。新しい段階でいえば、尾野編年のⅧ期新段階（11世紀前半頃）にあたる椀が神戸・上宿から出土している。集落構成としては住居址が激減する時期ではあるが、少数ではあるが流通している様相がみられる。

一方、渭辺郷に想定される沼目地区は、沼目天王原遺跡を中心として竪穴住居や掘立柱建物が集中する地区である。集落は7世紀後半からはじまり、12世紀代まで続く集落で、集落の主体時期は9世紀から10世紀前半頃とされている。灰釉陶器は、沼目諏訪面遺跡や沼目天王原遺跡の住居址から黒笹14号窯式段階の椀や皿からみられる。底面はヘラケズリ調整をする角高台で、特徴的である。灰釉陶器全体のピークは尾野編年Ⅵ期新～Ⅶ機古段階（9世紀後半～10世紀半ば頃）で、椀、皿、瓶・壺類が多く、集落の主体時期とほぼ同様な傾向にある。集落は12世紀代まで続くが、古代末に特徴的な10杯2類やロクロ土師器はみられるものの、神戸・上宿遺跡のような百代寺窯式の段階の灰釉は共伴しない。

相模国内では、いわゆる「拠点集落」といわれる遺跡から灰釉陶器が比較的多くみられる傾向がある。このことは、高級食器としての「灰釉陶器」ではなく相模国内においては日常的な器としての使用がされていた結果を示唆するのではないだろうか。ただ、一般集落となるとまた出土する頻度が異なるため、あくまでも各郷の拠点となる集落から出土する傾向が高いことがいえる。

相模国府域の灰釉陶器の搬入は、尾野編年Ⅴ期新段階からⅥ期古段階への移行期（9世紀代2四半期）に明確化し、Ⅵ期中段階から新段階への移行期（9世紀第3四半期半ばから900年頃にかけて）に最高潮に達するとし、尾張産（猿投窯産・尾北窯産）がほぼ占めている（平尾・尾野2009）。相模国府域内に大量搬入された灰釉陶器は、相模国内の河川交通を利用して官衙や拠点集落、拠点集落間のネットワークを通じて流通すると考えられており（田尾2015）、相模川を北上し、渋田川や鈴川などを利用して櫛橋郷や渭辺郷の拠点集落地へ運搬していったことが想定される。灰釉陶器のピーク時となる黒笹90号窯式～折戸53号窯式段階の産地についてはふれることができていない。この時期の産地が尾張産になるのか、三河・遠江産になるのかは別途検討が必要である。今後の課題としたい。（高橋）

（3）伊勢原市北部地域

伊勢原市北地域として取り扱った遺跡は渋田川周辺の、古代では石田郷と日田郷に位置する遺跡である。

北地域における灰釉陶器の総数は318点で、器種構成については、椀、皿、壺・瓶類が見られる。内訳は椀が218点、皿が47点、壺・瓶類が53点と椀が多く確認されている。窯式については、虎溪山1号窯式と折戸10号窯式と井ヶ谷78号窯式は確認されず、黒笹14号窯式では少量確認でき、そのあと黒笹90号窯式では増加を見せ、折戸53号窯式、さらに大原2号窯式で減少する。そして、折戸53号窯式では器種も碗のみが認められる状況となり、東山72号窯式と百代寺窯式とでは全く見られなくなってしまう。グラフの様子を見ると、（2）の南地域とほぼ同じであるが、北地域では見られなかった虎溪山1号窯式と折戸10号窯式と井ヶ谷78号窯式について、南地域では確認される点が少し異なる。出土傾向については、竪穴住居や切土整地層、水場遺構、道状遺構、段切などから出土が確認されており、（1）の秦野市と（2）の南地域と同様に竪穴住居からの出土が大半であった。総点数について、遺跡同士で比較してみると、一番多くの灰釉陶器が確認された遺跡は成瀬第二地区遺跡群高森地区において80点であった。その次は51点が確認された上粕屋・川上遺跡で、29点出土の西富岡・向畑遺跡第2地点がつづく。そして、上粕屋・和田内遺跡第7次調査や西富岡・向畑遺跡Ⅰ、東富岡・北三間遺跡、弥杉・上ノ台遺跡、石田・峯遺跡第4地点の5遺跡が15～19点の出土が

第3表 器種別一覧

	尾野編年	800	830	860	890	920	950	1070	不明	合計
		V期新	VI期古	VI期中	VI期新	VII期古	VII期中・新	VIII期新		
		折戸10号 窯式	井ヶ谷78号 窯式	黒笹14号 窯式	黒笹90号窯 式	光が丘1号 窯式	折戸53号 窯式	大原2号 窯式		
21 神成松遺跡第5地点	椀 皿類 瓶・壺類									0 0 0
22 神成松遺跡第8地点	椀 皿類 瓶・壺類									0 0 0
23 上粕屋・石倉中遺跡第3次調査	椀 皿類 瓶・壺類					1				1 0 0
24 上粕屋・一ノ郷上遺跡	椀 皿類 瓶・壺類									2 2 0
25 上粕屋・一ノ郷上遺跡 第2次調査	椀 皿類 瓶・壺類									3 0 1
26 上粕屋・雷遺跡	椀 皿類 瓶・壺類									2 0 0
27 上粕屋・一ノ郷南遺跡	椀 皿類 瓶・壺類									0 1 0
28 上粕屋・秋山上遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				1	1				2 0 0
29 上粕屋・和田内遺跡 第2次調査	椀 皿類 瓶・壺類			1						1 0 0
30 上粕屋・和田内遺跡 第7次調査	椀 皿類 瓶・壺類				8 1	1				9 2 4
31 長竹遺跡	椀 皿類 瓶・壺類									4 4 0
32 西富岡・長竹遺跡 第2次調査	椀 皿類 瓶・壺類				1					1 1 1
33 西富岡・長竹遺跡 第4次調査	椀 皿類 瓶・壺類									5 1 0
34 西富岡・長竹遺跡 第5次調査	椀 皿類 瓶・壺類					1				1 0 0
35 西富岡・中島遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				1					1 0 1
36 西富岡・向原遺跡Ⅰ	椀 皿類 瓶・壺類									3 12 1
37 西富岡・向原遺跡 第2地点	椀 皿類 瓶・壺類				1					16 7 5
38 上粕屋・ㄨ引西遺跡	椀 皿類 瓶・壺類									0 0 1
39 上粕屋・上尾崎遺跡	椀 皿類 瓶・壺類									0 0 1
40 上粕屋・三本松遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				3					3 0 0
41 上粕屋・川上遺跡	椀 皿類 瓶・壺類					3				37 4 7
42 東富岡・西之窪遺跡	椀 皿類 瓶・壺類									1 0 0
43 東富岡・北三間遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				4 2					7 2 2

県内集落出土の灰釉陶器の組成

	尾野編年	800	830	860	890	920	950	1070			不明	合計
		V期新	VI期古	VI期中	VI期新	VII期古	VII期中・新	VIII期新				
		折戸10号 窯式	井ヶ谷78号 窯式	黒笹14号 窯式	黒笹90号窯 式	光が丘1号 窯式	折戸53号 窯式	大原2号 窯式	東山72号 窯式	虎溪山1号 窯式		
44 東富岡・北三間遺跡 第2次調査	椀 皿類 瓶・壺類										1	1
45 東富岡・南三間遺跡	椀 皿類 瓶・壺類			1							7 1 1	7 1 2
46 東富岡・南三間遺跡 第2次調査	椀 皿類 瓶・壺類				1	2					6 0 1	9 0 2
47 弥杉・上ノ台遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				1						9 4 2	9 4 2
48 成瀬第二地区遺跡群 高森地区	椀 皿類 瓶・壺類					22 4 1		1			36 3 13	58 8 14
49 高森・宮ノ越遺跡 第二次調査	椀 皿類 瓶・壺類										1	1
50 石田・大久保遺跡	椀 皿類 瓶・壺類				1						1 0	1 1 0
51 石田・羽黒遺跡 第二次調査	椀 皿類 瓶・壺類											0 0
52 石田・一本松遺跡	椀 皿類 瓶・壺類										1	0 1
53 石田源太夫遺跡 第5地点	椀 皿類 瓶・壺類				3							3 0 0
54 石田・外堀遺跡 第2地点	椀 皿類 瓶・壺類										5 1 3	5 1 3
55 石田・峯遺跡 第Ⅱ・Ⅲ地点	椀 皿類 瓶・壺類					3 2						3 0 2
56 石田・峯遺跡 第Ⅳ地点	椀 皿類 瓶・壺類			1		10 1 1	3 1					13 3 3
		0	0	2	6	44	2	5	0	0	98	157

確認でき、そのほかは11点以下の出土が確認された遺跡ばかりで、ほとんどが1遺跡に1～3点ほどの灰釉陶器が確認される状況であった。ここで、上記の遺跡のうち、上粕屋・川上遺跡と西富岡・向畑遺跡Ⅰについて取り上げたい。

上粕屋・川上遺跡は、渋田川よりも一段上がった富岡丘陵の裾に形成された段丘面上に立地する遺跡で、古墳時代後期～平安時代の堅穴住居29軒、掘立柱建物跡7棟などの遺構が確認されている。8世紀前半に帰属する遺構が多いと考えられている。灰釉陶器は堅穴住居から4点、それ以外の47点はすべて遺構外からの出土である。住居出土の灰釉陶器は折戸53号窯式に比定されているが、遺構外から出土した灰釉陶器のほとんどが黒笹90号窯式のものと推定されており、灰釉陶器のほかに緑釉陶器も出土している。確認された器種を見ると、北地域全体の傾向と同じように椀が大半で、そのほかに皿と瓶、把手が確認されている。続いて、西富岡・向畑遺跡は、東側の富岡丘陵と西側の渋田川に挟まれた台地上に立地する遺跡で、これまでの調査によって古墳時代後期～平安時代にかけての200軒以上の堅穴住居と多数の掘立柱建物跡、道状遺構、溝状遺構などが発見されている。なかでも西富岡・向畑遺跡Ⅰの調査では、7世紀中葉～後葉とされるH9号堅穴住居跡から金銅製飾金具が8枚、絹紐で括られた状態で出土した事例や、8世紀後葉とされるH64号堅穴住居跡からは丸軔6点、巡方4点の帯金具が出土した事例が注目される。灰釉陶器については西富岡・向畑遺跡Ⅰでは堅穴住居跡から17点、掘立柱建物跡から2点、土坑から1点、遺構外から6点の出土が確認され

ている。西富岡・向畑遺跡第2地点では竪穴住居跡から2点、掘立柱建物跡から6点、土坑から2点、ピットから2点、切土整地層から17点が出土している。器種を見ると、やはり椀が多いが、ほかにも皿や段皿、把手付瓶、長頸瓶といった種類のものが確認できた。以上、比較的多くの灰釉陶器の出土が確認された2遺跡について概観したところ、灰釉陶器が確認される時期よりも少し前の段階となるが、西富岡・向畑遺跡Ⅰでは金銅製飾金具や帯金具といった特徴的な遺物の事例などから拠点集落と考えられる遺跡で、そうした遺跡から灰釉陶器が多く確認されることが読み取れた。一方で、拠点集落といえるような特徴的な事例は確認されていない上粕屋・川上遺跡でも、遺構外からの出土ではあるが、50点近くの灰釉陶器が出土する場合もあることが分かった。

(齋藤)

(4) まとめ

これまでに集成した灰釉陶器は、秦野市から出土した388点と伊勢原市を南北に分けて修正した灰釉陶器508点の計896点である。両市に共通している点は、尾野編年にあてはめると、Ⅵ期新からⅦ期古(9世紀後半～10世紀半ばごろ)にあたる900年前後に出土個体数の集中が見られる点と、出土傾向としては竪穴住居からが最も多く、器種構成としては椀の出土が最も多いことがうかがえることであろう。黒笹90号窯式に比定される製品が最も多く出土しており、光が丘1号窯式、折戸53号窯式と続く。10世紀後半以降の急激な出土数の減少についても共通の傾向が見られた。椀に次いで皿類が多く出土しており、日常使いの器が比較的多い傾向がある。また出土には集中する集落、いわゆる各郷の拠点となる集落があり、ほとんど出土が見られない集落との違いを灰釉陶器の分布の偏在性もあらわにしている。灰釉陶器だけではない視点からも検証する必要もあるであろう。

集成している期間に伊勢原地区、秦野地区に所在し、財団で時間をかけて調査していた発掘調査が終了し、順次整理作業に移行している。秦野市域では縄文の遺跡として注目を集める稲荷木遺跡や菩提地区、伊勢原市域では上粕屋地区などで、古代の集落も調査されている。これらの遺跡の情報が集積され、公表されたとき、神奈川県内でも山間部に近いこれらの地域における集落の様相や、今回の成果が補強され、修正されていくのであろう。

(加藤)

【参考文献】

- 田尾誠敏2015「関東への灰釉陶器の流入状況と在地土器」『灰釉陶器生産における地方窯の成立と展開』東海土器研究会
 かながわ考古学財団1998『かながわ考古学財団調査報告34 東富岡・杉戸遺跡 東富岡・北三間遺跡 上粕屋・川上遺跡 上粕屋・三本松遺跡 上粕屋・川上西遺跡』
 かながわ考古学財団 2014①『西富岡・向畑遺跡Ⅰ 第1分冊』
 かながわ考古学財団 2014②『西富岡・向畑遺跡Ⅰ 第2分冊』
 河野一也 1993「奈良時代寺院成立の一端について(Ⅳ)」『神奈川考古』第29号
 神奈川県立埋蔵文化財センター1990『草山遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18
 平尾正政幸・尾野善裕 2009「湘南新道関連遺跡出土施釉陶器の様相と相模国府」『湘南新道関連遺跡群』Ⅱ かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団

【図版展覧】

- 第1図 かながわ考古学財団1988「下大槻峯遺跡(No.30)Ⅱ かながわ考古学財団調査報告35」
 第2図 伊勢原市教育委員会1995『伊勢原市史 通史編 先史・古代・中世』